

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

「夢を叶える」

13

「やりたいことより、できること」という言葉がある。誰もが望む仕事に就けるわけではないから、一面の真理ではある。それ以前に、したい仕事が見つからない人にも便利な言葉かもしれない。だが、やりたい仕事に就くために努力を重ね、その夢や想いを実現した人たちもいる。そんな専修大学のOBとOGを紹介する。2人に共通するのは、決して諦めないということだ。

「北京オリンピックで金を取る！」
日本バレーボール協会初の専属アナリストとして
全日本女子チームを情報でサポート。

●渡辺啓太さん



2006年3月に専修大学ネットワーク情報学部を卒業。日本バレーボール協会強化事業本部に、全日本女子バレーボールチーム、専属アナリストとして所属

4年に1度のバレーボール世界選手権

「世界バレー」で全日本女子を応援した人は数多いが、エンドラインの後方でノートパソコンを持ち、コート動きを見つめる若い男性に気づいただろうか。日本バレーボール協会の専属アナリスト、渡辺啓太さんである。

サーブやアタック、ブロックの成功率や敵の攻撃ポイントなどを瞬時に分析して、無線でコーチに連絡。重要な情報は

と監督、コーチだけではないのである。

こうしたアナリストは、バレーボールに限らず、世界のナショナルチームでは常識的な存在だが、日本ではまだまだ発展途上。しかも、研究者などが情報分析していたため、コートで迅速に応用できるレベルではなかったという。渡辺さんは協会では初の専属であり、「アナリストが職業として成立するように道を切り開いていく責任があります」と語る。

「専修大学を卒業したばかりで、監督やコーチから見れば若手ですが、言うべきことを言わなければ自分の存在の意味がないので、妙な遠慮はしません」

全日本女子チームの遠征にも帯同するため、海外渡航も頻繁だが「ホテルと体育館の往復ですよ。ノートパソコンだけで3台、カメラも持っていくのでオーバーチャージを課されることも多くて」と笑う。チームが勝利した時には菅山や宝来などの人気選手たちともハイタッチだが、負ければすぐに敗因分析し、それをミーティングでプレゼンする。

まさに全日本チームの重要な一員なのである。

学生時代から アナリストとして参加

中学、高校とバレーボールの選手だった渡辺さんが専修大学ネットワーク情報学部に入学したのは、情報の受け手ではなく発信する立場になるため。文系で

もトライできる情報系だったからです」と言う。同学部で初めて実施したAO入試を受験。この時に「ITをバレーボールに活用したい」と意欲を語ったというから、この頃からアナリストへの道が始まっていたわけだ。

「専修大学でもバレーボール部に所属していましたが、ある試合でベンチに置かれたパソコンを見たのです。何をしているのだろうと興味を持ったのがきっかけで、2年の時から本格的に取り組むことに」

バレーの強豪イタリアが開発した専用ソフト「データ・バレー」があることを知ったが、学生には高価。

「ある教授に相談すると、最初から完成されたものを使うより、自分で創意工夫して作ってみると。それでエクセルでマクロ計算を駆使した自前のソフトを作りました」

本女子を改革したことは知られているが、アナリストにも当時3年生だった渡辺さんを起用したのである。学部生では初の快挙ということで、学長賞も受賞。そして、卒業後は協会の専属となった。大多数の人にとって仕事は「選ぶ」ものだが、渡辺さんは自分自身で「創った」といえるのではないだろうか。もちろん今では自前のソフトでなく、「データ・バレー」のペビューザー。自らも選手だった経験が、この分析に加わり、さらに実践的でオリジナルな情報にしているのだ。

「自分なりに得意な表現方法に出会えた。そのことに幸せを感じます」 小説家志望の大学院生から脚本家に転身してテレビ界で活躍。

●渡邊睦月さん



脚本家。1994年に専修大学文学部を卒業し、大学院文学研究科に入学。1997年に修了(文学修士)。

「大学での勉強はプログラムからデザインまで、今でも生きています。3年次のプロジェクトでも、仮説と検証の繰り返しという考え方や、いくら寝ずに頑張っても、他人に理解されなければ終わりということを知りました。もう1回勉強したいくらいですよ。専修大学は何か思いがあれば、それに応えてくれる先生と環境があります。だから専修OBであることに誇りがあります。これからの目標ですか？ もちろん北京オリンピックで金を取ることです」

しかし、「小学生の頃からずっと、小説家志望でした」という。小説家志望が、何故、脚本家になったのか。その過程を丹念に追うことから始めてみたい。

渡邊さんが専修大学文学部に入学した理由は「その頃、唯一、現代文学の専攻があった」から。

近世や近代文学を学ぶことも大切だが、現代で小説を書くために、少しでも現代文学の傍にいたかったのだ。「生田キャンパスに行く坂道だけは大変でしたが(笑)、いい思い出ばかりです。中でもやはり、現代文学のゼミが興味深く、一度も休みませんでした。好きな小説を選び、レジュメを作って発表し、それに基づいた討論をする。違う見方や考え方を聞けて楽しかったですし、指導教

授も、困った時にはアドバイスをくださいますが、学生の自主性を重んじて、とても自由にやらせてくださいました」

小説家志望だったため、卒業時にも就職の発想そのものがなく、大学院文学研究科に進学。「もし小説家になれなくても、研究者として文学の傍にいらればいい」そう思ったからだ。が、本格的に現代文学の研究を始めてみると、「やはり、自分は書く側でいたい」という思いが募る。

そんな時、ふと見たテレビドラマ『古畑任三郎』に衝撃を受ける。

「初めは、内容というより構成に興味を感じました。脚本はもって、情で流れると思っていたのですが、あのドラマは数学的に計算されています。その上で、『人間』を描けている。これはすごい！と。私も書いてみたい！と。翌日には、脚本家になろうと決めていました。それくらい、衝撃的だったんです」

大学院時代の経験が 脚本作りでも役立つ

「小説も応募したことがありますが、最初から自信がありませんでした。と

ころが脚本には、それなりの感触が持ったのです。例えば、話すことだったり、ダンスだったり、絵を描くことだったり、人には必ず自分に適した表現方法があると思っただけですが、私にはそれが脚本だったようです。小説ばかりを見つめて生きてきましたが、ちょっとよそ見をしたことで、脚本という表現方法に出会えた。とても幸せなことだと思います」

小説は基本的に個人的な作業だが、脚本は映像の台本であり、数多くのスタッフとの共同作業となる。打ち合わせで内容が変更となり、翌日提出のために徹夜することも珍しくない。

「俳優さんも含めて数多くのスタッフが関係しているので、1日遅れば大損害ですから。今では1時間ドラマの場合のページ数なども感覚的に分かるようになります。初めての仕事の時、連続ドラマのお話をいただいたのですが、十数話を作るのにどこから手をつければいいのかさえ見当もつかなくて、慌てているんな連ドラのビデオを借りて、その全話の構成、台詞まで全部書き出して、分析、勉強したこともあります」

大学での勉強があまり役立たない分野に見えるが、決してそうでもないようだ。

「特に、時代物や実話のドラマ化の場合などは、文献を数多く調べたり、取材するのが必須。大学院時代に膨大な調査をしたせいか、それが苦にならない。むしろ楽しいくらいです。感謝しています。そうして書いた脚本をスタッフや俳優さんに引き継ぎ、想像以上の映像になった時は最高に嬉しいですね」

渡邊睦月さんは、主にドラマを中心に活動する脚本家である。『ボイスレコーダー』〜残された声の記憶〜ジャンボ機墜落20年目の真実』『日本のシンドラー 杉浦千畝物語、六千人の命のピザ』などの社会派番組から、竹野内豊、チエ・ジウ主演で話題になった『輪舞曲(ロンド)』、山田孝之、沢尻エリカ主演の『タイヨウのうた』といった恋愛ドラマまで、ジャンルを問わず手がけている。